

教育情報コーナーからのお知らせ

元NHKアナウンサー、

後にNHK放送研修センター日本語センターで

10月 

「先生のためのことばのセミナー」を担当してきた著者が、

先生たちの「ことばの伝達力」をみがか手立てを解りやすくまとめています。

430のヒントの中からいくつかを紹介。後はぜひ、手にとってお読みください。

若い先生方には必読です。

『先生にこそ磨いてほしい「ことばの伝達力」～教室で役立つ30のヒント』

加藤昌男著(NHK出版)より

ヒント1 チャイムが鳴ったら、ことばの切り替えを

「場面」が変われば「ことば」も変わる。社会生活の基本です。切り替えの習慣は、まず教室で身につけること。「うん」から「はい」へ。「だよ」から「です」へ。友だちことばから学習のことばへ。チャイムを合図に、まず、先生が率先して、ことばのモードを切り替えることです

ヒント2 前列から4～5人目の生徒に「届く声」で

先生の声が小さい。子どもの発言も聞き取れない。授業参観で、よく感じることです。教室は、先生の肉声が十分に届く広さです。隅々まで聞こえる声を出すコツは、前から4人～5人目をめがけて「届く」声を出すこと。そうすれば、声の明るさも、ことばの明確さもまします。

ヒント3 教室のコミュニケーションは「一対一」の35倍

先生と生徒の関係は「一人対多数」。しかし、教室での情報伝達は一方通行ではありません。35人学級なら「一対一」の35倍が教室でのコミュニケーションです。目と目も、うなずきも、笑いも、動作も、35とおりの手ごたえを確かめながら、授業を進めることです。

ヒント9 明快なメッセージを授業の冒頭で

「要するに何を知り、どんな技能を習得してほしいのか」、これがメッセージです。要した趣旨を授業の冒頭で示すこと。ねらいのはっきりしない授業は学ぶ側が戸惑うばかりです。趣旨をまず伝え、その裏づけとなる要素を明快に組み立てるのが、授業の「設計」です。

ヒント10 伝えたい内容は3項目以内に

くどくどした話をたしなめるときに「四の五の言うな」と昔から言われます。ひとまとまりの話に盛り込める要素は多くても3つ。それ以上は聞き手も理解しきれません。スピーチでも授業でも同じこと。伝えたい情報を選択、分類して、思い切り絞り込むことです。

ヒント27 あがらないコツは「欲張らない」「背伸びをしない」

人前であがらないコツは、「欲張らない」「背伸びをしすぎない」ことです。あれもこれもと欲張ると、心に余裕がなくなります。また、そのときだけいい格好をしよう、別の人格を演じよう、としないこと。やや背伸びはしても、しすぎないことです。

ヒント29 「叱る」ことば、「褒める」ことばを豊富に

「先生に怒られた」と子どもが感じるときは、先生は「怒って」しかいないのです。軽い忠告や、優しい助言も、ことばが乏しいと怒りとしか伝わりません。褒める場合も同じです。細かいニュアンスを伝えることばと、示す態度が、子どもとの関係を豊かにします